

可能性を秘めたアナログの光

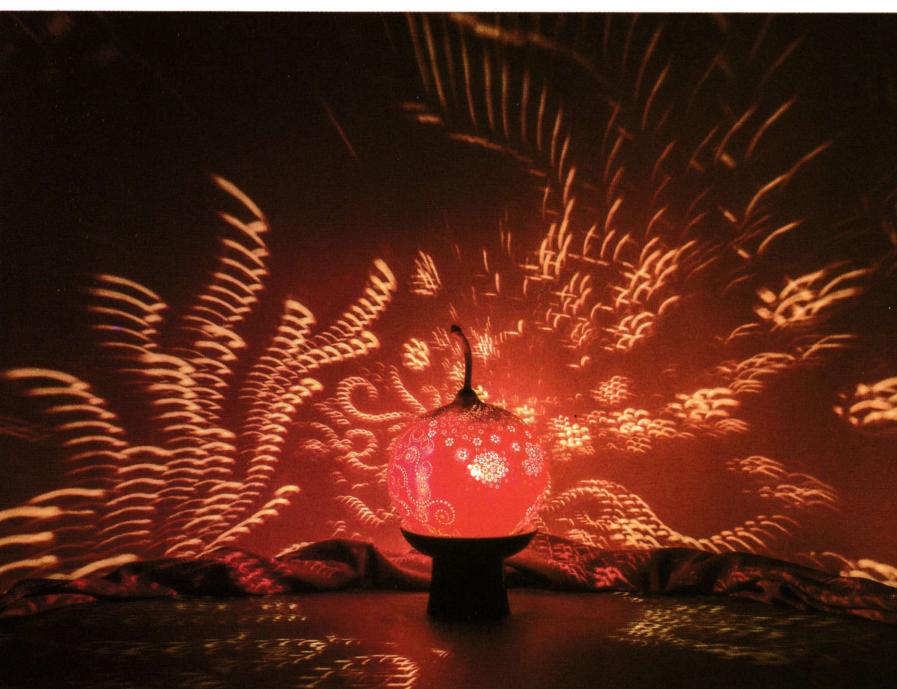
宇佐見 啓治



《滝桜》



《蘭ぶ》 2015年 ひょうたん 30×20×20cm



《光の迷宮》

宇佐見啓治氏の「蘭ぶ」と他の「滝桜」「光の迷宮」の二点とも作られたその物が作品というのではなく、ランプシェードとして光を灯した時に壁に映り込んだ光の織りなす文様によって初めて宇佐見氏の作品といえるだろう。現在のコンピューターとレーザー光線によって写し込むプロジェクションマッピングによるアートではなく、デジタルを介在させないアナログの光によるアートは、現代アートとしてはこれから最も注目されるべきジャンルの一つである。

作者が医師であることから、超音波検査による診断画像にも相通ずる世界があるのでと推測してしまう。超音波検査も検査患部との微妙な距離によって画像は様々に湾曲したり、濃淡を見せたり、常に動くように変化するが、宇佐見氏の壁に映し出された光のアートは壁からの距離を変えたり、ランプシェードの位置を変え



ることによって千差万別な映り込みによる光の文様に変化を見せる。それは刹那的でもあり、手で触れようと少し触れるこの叶わない、やがて消えゆく世界であるがゆえに美しい。

現在はランプシェードから放つ光のアートであるが、瓢箪以外の発光体による新たな可能性も秘めている。事実、最近の光によるインスタレーションは映される側のスクリーンに工夫が

凝らされている。映り込む壁を単なる平面的な壁ではなく、様々な凹凸やカーブを持つたスクリーンを用意することによって無限の可能性を秘めた光のアートは、一つの創作世界としてこれからもっと期待されて良い分野であろう。瓢箪から始まった宇佐見氏の仕事は様々な可能性を秘めている。深遠なる光のアートへのスタートとも言えよう。

文／横堀聰

Usami Keiji

1955年福島県生まれ。福島県立医科大学卒。世界らん展（第25回2015アート審査部門最優秀賞、第26回2016アート審査部門奨励賞）。現在、医療法人うさみ内科院長。